

第3章 「宮前の歴史めぐり」



1 歴史話

1 「熟田津」古三津説

にぎ た つ ふなの つきま
熟田津に船乗りせむと月待てば

しお いま こ い さくしゃ ぬかたのおおきみ
潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな (作者：額田王)



ひさえだじんじゃ せきひ
久枝神社にある石碑



みやまえしょうがっこう こうてい せきひ
宮前小学校の校庭にある石碑

この歌を知っていますか？素晴らしい歌をたくさん集めて作られた「万葉集」という古い和歌集に載っている歌です。歌と恋に生きたといわれる額田王という女の人がこの歌を作りました。久枝神社や宮前小学校の校庭にある石碑にも、この歌は刻まれています。それが、上の写真です。左が久枝神社にある石碑で、右が宮前小学校の校庭にある石碑です。久枝神社にある石碑の方は、万葉仮名という書体で書かれています。



この歌は、どういう意味かな？



「熟田津で、船に乗って出発しようとして月を待っていたら月が出た。
海水もちょうどよい様子になった。さあ今こそ漕ぎ出そう。」

斉明7年（661年）、斉明天皇と中大兄皇子の軍勢が朝鮮半島の百済という国を助けるために九州に向かう途中に「熟田津」に立ち寄った。伊予の湯（現在の道後温泉）で保養するとともに、兵士を補充することが主な目的だったと考えられている。巫女でもあった額田王が「熟田津」の歌を歌い上げる中、一行は「熟田津」の港を堂々と出港していったことだろう。「熟田津」の港は天皇や皇族方が使われていたので、「御港」と呼ばれ、それが「御津」→「みつ」→「三津」へと変わっていったと考えられている。

「熟田津」は古三津であるという説がある！右の絵は、宮前小学校と久枝神社にある「熟田津の想像図」だよ。



「熟田津」とは、もともと、「耕して稲を植えるとよく実る田んぼのある港」という意味である。この「熟田津」が伊予のどこにあったのかははっきりとわかっておらず、研究家の間で議論を呼んでいる。その中に「熟田津古三津説」というものがある。

古代の古三津には海岸線があり、斉明天皇たちが伊予の湯で保養したことを考えると、道後温泉に程近い古三津が「熟田津」なのではないか、と考えられているのだ。

他にもいろいろな説がある。山越から吉田浜説や和気・堀江説などがそれだ。しかし、どの説も決定的な根拠に欠けており、今後の研究が待たれている。古代の松山について研究して、「熟田津」の場所が一体どこなのか、あなたも謎を解明してみませんか？

2 刈屋畑の合戦



いま ねんまえ おこな てんかわ め
 今から 410年前に行われた「天下分け目の
 せきがはら だいかっせん まつやまぼん
 関ヶ原の大合戦」の松山版だよ。

いま ねん まえ ねん けいちょう ねん がつ ぎ ふ けんせきがはら てんか
 今から 400年あまり前の 1600年（慶長5年）9月、岐阜県関ヶ原において、天下
 わ め たいせん おこな たたか てんか じぶん て
 分け目の大戦が行われた。この戦いは、天下を自分の手にすることをねらった徳川
 いえやす とよとみ てんか つづ いしだみつなり たたか
 家康と豊臣の天下を続けようとする石田三成らの戦いである。

ちほうばん おお ちいき おこな まつやま おこな
 その地方版は、多くの地域で行われており、松山でも行われている。それが
 かりやばたけ かっせん
 「刈屋畑の合戦」である。

とうじ まつやま とよとみひでよし しこくせいぼつ りょうち うば こうのけ か ひでよし
 当時の松山は、豊臣秀吉の四国征伐にて領地を奪われた河野家に代わり、秀吉の
 かしん かとうよしあき おさ たたか りょうしゅ ざ うば
 家臣である加藤嘉明が治めていた。この戦いは、領主の座を奪いかえそうとする
 こうのけ ぐんぜい みかた もうりてるもと ぐんぜいおよ せとないかいすいぐんむらかみけ れんごうぐん
 河野家の軍勢とそれに味方する毛利輝元の軍勢及び瀬戸内海水軍村上家の連合軍
 せいぐん とうじ まさきじょうしゅ かとうよしあき ぐんぜい とうぐん たたか
 （西軍）と当時の正木城主である加藤嘉明の軍勢（東軍）との戦いであった。

せいぐん ひろしまけんたけはら ご ごしま しゅうけつ にんあま へい ふね たいぐん
 西軍は広島県竹原より興居島に集結。3000人余りの兵、250 もの船の大軍であ
 げんざい ふるみついち、にちようめ とうじ とち よし むすう お しげ
 った。現在の古三津一、二丁目は、当時、土地がやせていて葦が無数に生い茂って
 じゅうみん よし かま か よしはら はたけ かいこん
 おり、住民はこの葦を鎌で刈って葦原から畑へと開墾していた。そういったこと
 いったい かりやばたけ よ しゅうけつ せいぐん かりやばたけ じん
 からこの一帯は「刈屋畑」と呼ばれていた。集結した西軍はこの刈屋畑に陣を
 し せいぐん むらかみもとよし ただ つか もの とうぐん かとうよしあき まさきじょう おく しろ
 敷き、西軍の村上元吉は、直ちに使いの者を東軍の加藤嘉明の正木城に送って、城
 あ わた せま
 の明け渡しを迫った。

とうぐん しゅくん かとうよしあき せきがはら しゅつじん たたか ふり る す
 東軍は、主君の加藤嘉明が関ヶ原に出陣しており、戦いは不利であった。留守
 ま かるうつくだかずなりい か へいし つくだかずなり おんなこ
 を守っていたのは家老 佃十成以下のわずかな兵士であったが、佃十成は、女子ど
 ひなん じかん もう で じかん ひ の
 もを避難させるため、しばしの時間がほしいと申し出た。そして、時間引き延ばし
 あいだ しろ まわ じゅうみん かね もの あた つぎ せんでん
 の間、城の周りの住民に、金や物を与えて次のように宣伝をさせた。

かとうよしあき せいじ りょうみん きび ねんぐ と た くる
 「加藤嘉明の政治は、領民に厳しい年貢の取り立てをして苦しめているため、
 こうのし ふたた せいじ と もど こころ ねが いま まさきじょう
 河野氏が再び政治を取り戻してくれることを心から願っている。今、正木城に
 としよ びょうにん つくだかずなり たいびょう
 いるのは、年寄りと病人ばかりで、佃十成も大病である。」

かんげい うたげ しょう かりやばたけ せいぐん さけ の せいぐん
 また、歓迎の宴と称して、刈屋畑にいる西軍に酒を飲ませた。西軍は、すっ
 あんしん き ゆる しゅえん ひら せんしょうきぶん
 かり安心して気が緩み、酒宴を開いて戦勝気分ひたった。

このようすを見た東軍の佃十成たちは、夜の闇にまぎれて各地に火を放ち、大軍が襲ったように見せて少ない兵士で暴れまわった。西軍は、酒宴と無防備のため不意をつかれ、三将である村上元吉、能島内匠頭、曾根兵庫をはじめ、大勢の武将や兵士がこの刈屋の地で討ち死にしたのである。

この夜の戦いに敗れた西軍だが、その後も地元の旧河野勢力と連絡をとりながら、荏原、久米、山越などで東軍に抵抗を続けた。しかし、中央の関ヶ原の合戦で、西軍の敗戦が決定的であるという知らせに、伊予の西軍も浮足立ち、「もはやこれまで」と竹原まで逃げ延びたのである。これを「竹原崩れ」という。そして、このとき、村上水軍も滅亡したのである。

この戦いによって多くの武将や住人が犠牲になったばかりでなく、厳島神社や法雲寺などの多くの神社仏閣も焼失した。

地元の人たちは、この激戦で戦死した武将や名もなき兵士の霊をなぐさめるため、ほこらをつくってまつた。そして、現在、この地区一円にこの戦いで亡くなった西軍の武将たちのほこらが多く存在している。地元の人々は「若宮さん」「能登さん」「加藤さん」「曾根さん」などと親しみを込めて塚の名を呼んでおり、現在も大切にまつているのである。



わかみや
若宮さん

かりやばたけ かつせん
「刈屋畑の合戦」コースは、
の
P28・29に載っているよ。



のと
能登さん

3 古三津南けんか古神輿



秋祭りの由来について

昔から神輿は、鈴を鳴らしたり激しくねったりするほど神様の力が
 高まり、人々に幸福を与えてくれると信じられてきた。三津 巖 島神社の
 秋祭りは、慶長7年（1602年）、神社が現在の場所に建てられたころから
 始まったと伝えられており、けんか神輿もこの信仰にもとづくものだ。
 豪快に鉢合わせをすることにより、神様と人とが一体となり、かき手や
 参拝者にご利益を与える神事として現代に伝わっている。



三津 巖 島の秋祭りは、明け方の宮出しで知られ、勇壮なけんか神輿の鉢合
 わせが有名である。上の写真の神輿は、この秋祭りに、昭和8年（1933年）
 から昭和61年（1986年）まで54年間活躍した。古三津の人々を祭りに熱中
 させた歴史に残る古三津南古神輿である。その勇姿を後世に残し、三津 巖
 島神社の秋祭りを伝承するために 巖 島神社と久枝神社に写真を奉納して
 いる。また、20年余り、久枝神社境内に保存されていたが、現在は宮前小学校
 に移して展示保存している。

平成20年8月から宮前小学校に保存しています。
 2年活動室にあるから見てね。

